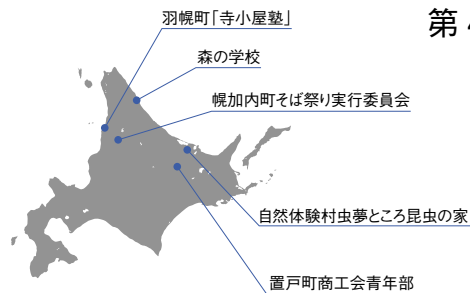


「わが村は美しく —北海道」運動

第2回コンクール

入賞団体を訪ねて



第4回

「わが村は美しく—北海道」運動第2回コンクール（北海道開発局主催）には、全道197件もの応募があり、景観、地域特産品、人の交流の3部門に分かれて審査・選考が行われ、平成17年2月25日には表彰式が行なわれました。

本シリーズでは、この受賞21団体の活動現場の訪問レポートをコンクール審査委員の方々にまとめていただきます。

生産量だけではない、
真の日本一のそばのマチを目指して

人の交流部門・金賞

幌加内町そば祭り実行委員会（幌加内町）

レポーター 野谷 悦子

昭和45年に米の転作作物としてそばの栽培を始めた幌加内町は、JAや生産者の努力で昭和55年ころからその生産量もダントツの日本一となりました。しかし、その一方で「幌加内の玄そばが長野に行って信州そばに生まれ変わる」というジレンマを抱え続けてきました。そこで、生産量だけではない本当の意味での日本一のそばのマチを目指そうと、平成6年に始まったのがそば祭りです。

町民が競い合ってそばを打つ

当初の3年間はそばの花が咲く時期に祭りを実施していましたが、4回目からは「とりたて、



ずらりと店が並ぶ「全国そば食べ歩き広場」

ひきたて、うちたて、ゆでたて」をキャッチフレーズに収穫が行われる9月上旬に変更しています。新そばが食べられる祭りとしてすっかり定着し、昨年も4万3000人の来場者でにぎわいました。

会場内には「全国そば食べ歩き広場」が登場し、昨年は15店が軒を並べました。このうち6店は町内からの出店です。そば屋1軒のほかにそば打ち愛好会の「そばうたん会」、自治区の同好会、幌加内高校の生徒たち（そば打ちの単位がある）が味を競い合いました。「最初のころはなかなか町内からの参加がなく、お願いして回っていましたが、今は出たい人が多くて場所が足りないほどです」と飲食担当の川嶋哲男さんは言います。

そば農家でそばうたん会メンバーの澤田勲さんは素人そば打ち4段の腕前で、1回目からずっとそばを打っています。第5回目までは地元からの出店はそばうたん会のみでしたが、澤田さんは在住する自治区の農家の人たちに協力を要請し、第6回に向けて猛特訓^{きたさいかん}を実施。そして、そば農家15組の夫婦が「北最寒」を結成して店を出したのです。「この年の打ち上げの盛り上がりは今も忘れられない」と澤田さんはうれしそうに語ります。

さらに、「北最寒」が刺激となって、ほかの自治区にもそば打ちが広がり、現在は7つの同好会と67人の有段者を輩出しています。祭り当日は天ぶらを揚げたり山菜をのせるなどして個性を出し、それぞれが面白いライバルです。

そばを打つだけではありません。テントを張り、裏方の準備をするなど、祭りに関わる人は約500人。人口約2000人の町ですから、まさに町民が総力を挙げてと言っても過言ではないでしょう。



素人そば打ち段位認定は真剣そのもの

波及効果は多方面に計り知れず

今では順風満帆、大盛況に見える新そば祭りですが、「試行錯誤の繰り返し。苦情もたくさんありました」とそば活性化協議会の小林四郎事務局長は振り返ります。朝比奈民雄活性化部長は「金もない、物もない、人もない。だからあちこちお願いしまくりました」と第1回開催を思い出して笑います。

駐車場が足りない、そばが足りない、雨が降って会場がどろだらけになった…。さまざまな苦情や意見は、必ず次の祭りに反映しました。全国素人そば打ち段位認定会を期間内に実施するなど、常に新しい企画を盛り込み続けてきたことも大きな特徴です。一昨年に第10回の節目として行われた「世界そばフェスタ」は、11カ国からさまざまなそば料理が提供され、その集大成とも言える催しでした。

こうして町民が情熱を持って取り組んだからこそ、新そば祭りは一過性のイベントに終わっていません。その波及効果は具体的にさまざまな方面に現れています。第4回にはそば製品を作って売ろうということになり、(有)ハード（現在は株式会社）が設立されました。減少しつつある商工会には新規開店したそば屋（かつては町内に1軒もなかったそば屋が現在は13軒）や製粉業者が加入して、活気を与えています。澤田さんの説によると「夫婦でそば打ちをする人が増え、共通の趣味を持つことで夫婦のコミュニケーションが良くなった」という意外な効果も。そして何より、幌加内ブランドを全国に知らしめたことは、地場産そばの消費拡大に大きく貢献しています。

農作業や物作りを通して子どもたちに生きる力を

人の交流部門・特別賞

羽幌町「寺小屋塾」(羽幌町)

レポーター 野谷悦子

寺小屋塾は、農作業や物作りなどを通して汗を流して働くこと大切さ、工夫をして物を作る喜び、自然のすばらしさなどを子どもたちに伝える活動をしています。対象は小学1～6年生。毎年募集をかけ、40人前後が1年を通して参加します。運営に携わるのは定年退職者を中心とするシルバー世代です。さらに、農家や漁師、料理人、大工、また趣味で一芸に秀でたさまざまな人たちがアドバイザーとして協力し、寺小屋塾を卒業した中学生・高校生もサブアドバイザーとして活動しています。

自分でやる、工夫をする、それが基本

代表の室田憲作さんは元中学校の校長先生。忍耐力がなく、テレビゲームに熱中するあまり授業中に居眠りしたり、戸外で遊ぶことを忘れた子どもたちを見て、この状況を何とかしたいと思い続けてきました。酒を酌み交わしながら仲間とこの問題を語り合い、4年の歳月を経て平成9年の定年を期に11人の運営委員で始めたのが寺小屋塾です。

活動は年間11回（キャンプ1回を含む）。中心となるのは農作業です。町内の農家に協力を得、昔ながらの方法でさまざまな農産物を育てます。収穫祭ではジャガイモやカボチャで団子を作ったり、豆腐作りやそば打ちもします。アドバイザーの豆腐屋やそば打ち愛好会のメンバーは強力な助っ人です。



漁協の協力で地引網を体験



キャンプでの食事作りも手馴れたもの

ジャガイモとカボチャは社会福祉協議会のイベントで販売もします（売り上げは社協に寄付）。担当するのは4年生以上なので、「高学年だから」というプライドと責任感を持って頑張ります。台車に旗を立てて会場を回るなど、自分たちで工夫して販売するあたりは、さすが寺小屋塾の子どもたちです。

12月には独居老人を招いてもちつきをします。ついたもちは雑煮にしたり、正月用のまゆだまを作ったりします。あんこもちを作るおばあさんの手早さに大感激し、昔の人の手作業のすばらしさを実感するという一幕もありました。

毎回の食事は基本的に野外炊事です。石を集めて釜を作り、薪まきでごはんを炊きます。「はじめは戸惑う子が多かったのですが、継続して参加している子が後輩に教え、今では手馴れたもの」と室田さん。家庭での体験が少ない現代の子は、焼肉をしても自分でさっさと食べられる子と、黙って見ている子に分かれるそう。でも、「 TENT を張るのも食事を作るのも自分たちであるのが基本。やらなければ食べられないし、寝られません」。キャンプではけんかしたり、腹が痛くなったり、家が恋しくて泣き出す子もいます。辛いこともあるけれど、やっぱり帰ってくる。それは、達成感という満足を知ったからでしょう。

漁師や大工など幅広い協力体制

地域の産業と言えば、漁業も忘れられません。目の前が海なのに、海で遊ばない子どもたちが大半です。そこで始めたのが6月末の地引網。漁協と釣り船を持つアドバイザーの協力で網を張ります。みんなで協力して網を起こすと、中にはアカハラ、チカ、マメイカ、カレイ、モズ

クガニが…。とれた魚を生け簀すに入れてつかみ取りさせると、もう興奮状態です。収穫物で作った浜鍋やすり身団子の味は格別です。

6年前には、寺小屋塾の活動に注目した技能士会青年部から協力の申し出がありました。こうして始まったのが木工体験です。大工さんの指導でイスやコーナーラック、ブーメラン、巣箱などを作ります。このプログラムは毎回の参加者以外にも広く呼びかけているので、150人程度が参加していますが、お父さんやおじいちゃんの参加が多いのが特徴です。

紹介したように、寺小屋塾は地元のさまざまな人たちの協力を得て、活動の幅を広げてきました。「何かしたいと思った時、いろいろな人が関わっているから話が早い」と室田さん。また、子どもたちと過ごす時間は、寺小屋塾に関わるすべての人たちの喜びでもあります。大きな声を出して体を動かし、夜にはみんなでうまい酒を飲めば、年齢も疲れも忘れてしまいます。

シルバー世代の生きがいと子どもの生きる力が結びついた寺小屋塾。これからの少子高齢化社会に一つの突破口を見せてくれたような活動でした。

北の大地が育てる、 たくましい子どもたち

人の交流部門・銀賞

森の学校（枝幸町）

レポーター 野谷悦子

枝幸町の市街地から車で5分ほどの場所にある村金拓殖株の社有林に、マチおこしグループが21年前に手造りで建てたログハウス「ノーザン」があります。ここが「森の学校」の活動拠点です。鳥のさえずりを聞きながら、まずは森の中を散策してみました。すると、いきなりエゾシカとクロテンを発見。ほかにもエゾモモンガやクマもいると聞き、ますます驚きます。

「このすばらしい自然環境を維持していくには、地域の人たちがそのことにもっと関心を持つことが大切です。そのためには、子どもの時から自然の中でのびのび遊ぶことが一番」と村金拓殖株代表取締役で森の学校校長の村山裕さんは言います。

自分の体で感じ、自分の力で行動する

森の学校の設立は平成10年。現在は13人のスタッフが昨年の実績で年間16回（そのうち5回はキャンプ）のプログラムを実施しています。メンバーはサラリーマン、主婦、獣医、保健師、農業などさまざまで、5人の女性スタッフがいることはこの種の活動としては特筆すべきことと感じました。対象は小学3～6年生で、毎年30人前後の参加があります。保護者同伴で障害児が参加した年もありました。

プログラムの中心は、登山やハイキングです。事前の練習を経て、最終的には大雪山に挑戦します。ほかにも川や海での活動や植樹も実施し、プログラム全体を通して森と川と海がつながっていることを実感できる内容です。

開始当初はスタッフの中にも水洗トイレでなければダメ、テントでは寝られない、野外炊事はしたことがないという人がいたそうですが、今の活動を聞くとかなりサバイバルです。宿泊は当然テント。冬はかまくらに泊まります。食事は子どもたちが中心になって火をおこし飯ごうでごはんを炊きます。トイレは穴を掘っておがくずをかけ、土に返すバイオトイレです。また、メイプルシロップを集め、山ブドウでジュースを作り、森には食べられるものがいっぱいあることを知ります。

「言葉で教えることではなく、自分の体で感じ、考えて行動することが基本」と村山さんは言います。幅広い価値観を子どもたちが持つようにと、自然保護などに関しても大人の考えを押し付けることはしません。

また、雨が降ることも、寒いこともあるし、登山では苦しい時もあります。自らも大学時代は山岳部で鳴らした事務局長の十川雅弘さんは「自分で乗り切るのが目標ですから、ギリギリまで手は貸しません。そんな時は、スタッフもがまんです」。当然、万全の下準備が必要で



昨年の台風の倒木で作ったモニュメントは、「ぼくらの森」のシンボル

すし、スキル（技能）も求められます。「確かに自然の中では危険も伴います。でも、



活動のクライマックスともいえる大雪山への登山

ネガティブな発想では何もできません。万全の体制を整えた上で、子どもたちに冒険をさせたい。子どもたちにはドキドキする刺激が必要なんです」と十川さん。チャレンジし、乗り越えることで、子どもたちに生きる知恵がついてきたことをスタッフは皆実感しています。

スタッフの連携も絶妙、まず大人が楽しまなくちゃ

楽しんでいるのは子どもたちだけではありません。スタッフ会議ではやりたいことが噴出します。「せんべいを焼いてみたい」というユニークな意見が出れば、即実行です。今年度の目標は、炭焼きをする、レンガでピザ釜を作る、ミツバチを飼ってハチミツを作る、昨年の台風で倒れた木を使って秘密基地を造る。「子どもをダシにして自分たちがやりたいことをしてるんですよ」と十川さん。

その一方で事務局の中村由美さんは「まるで少年のような男性たちが情熱的に暴走するので、時には私がブレーキをかけないと」と笑います。中村さんは、食料の買出しやキャンプ道具の片付けなど、地味な裏方の仕事をきっちりこなしてくれるおふくろさんのような存在です。そんな見事な役割分担も、充実した活動を支えているのでしょう。

森の学校には壮大な夢があります。それは町が所有する5,000ヘクタールの農廃地を森に返すこと。村金拓殖(株)の森の大木が落としたドングリを集めて苗まで育て、植樹しているのです。ここは「ぼくらの森」と名づけられ、昨年の台風で倒れた木で作ったモニュメントと看板が設置されています。何十年という未来に向けた種まきは、未来を担う子どもたちを育てる森の学校の活動の理念そのものでもあります。

林業の町置戸の文化を伝える 人間ばん馬大会

人の交流部門・特別賞

置戸町商工会青年部（置戸町）

レポーター 有山 忠男

置戸町人間ばん馬大会は、第2回「わが村は美しく一北海道」運動コンクールで特別賞を受賞しました。イベントの発想、展開方法、そして長年の実績が高く評価されたわけですが、その背景には林業の町置戸に対する町民の強い誇りと愛着がありました。まさに置戸に住む人々の歴史と知恵が生み出した、林業の町置戸の文化を伝える祭りなのです。

始まりはバチ曳き合戦

置戸町は林業で発展してきた町です。昭和29年の洞爺丸台風で林業従事者が急増、この当時は13,000人ほどの人口を擁していたようですが、その後、林業の低迷とともに人口は減り続け、現在の人口は3,800人と当時の3分の1になりました。

置戸町の人口がだんだん減少していく中で、“何か地元の産業を生かした特徴的な祭りをつくりたい”という地域の強い思いがあり、そうした中で地元商工会青年部により考案されたのがこの人間ばん馬大会です。

最初は昭和52年、「山神祭バチ曳き合戦」という名称で、商工祭のイベントとして始まりました。「バチ」とは山で伐採した木材を運搬するソリのことです。このソりを、馬ではなく人間が引っ張って競い合い、当時の山仕事の苦勞を偲ぶとともに、林業の町置戸をアピールしようというのがこの祭りの発想です。



人間ばん馬レース

さらに、この行事は、単なる力比べ競技ではなく、山の神を祭る神事の一環であることです。すなわち、置戸の林業者は、森の木を伐る際、神木の前に鳥居を設け山の神を祀るという伝統があり、それをこの祭りの中で再現しようとしてきました。

人間ばん馬の発想は商工会青年部から出たものでしたが、人間ばん馬がここまで発展できたのは、山で働く人々、すなわち林業関係者の協力があったからだと思います。彼らの助言や協力なくしてこのイベントの成功はなかったと言われます。大会の企画運営から丸太の伐り出し、皮むき、バチ組み、山上祭の鳥居づくりなど、林業関係者の役割は極めて大きなものでありました。

なお、5年後の昭和56年には、より大きな地域行事へと発展させたい思いから、バチ曳き合戦は現在の「人間ばん馬」という名称に改められました。

限界への挑戦が感動を生む

人間ばん馬大会の競技は、5人曳きレースと7人曳きレース、それからアトラクションレースの3つの種目があります。5人曳きと7人曳きレースは、予選で300kg、決勝で500kgを曳くもので、かなり過酷な競技です。ソリの重量や曳きずる摩擦力などを考慮すると一人当たり200kgもの負担になるようです。

平成16年度は、町内外から72チーム、総参加者数533人、観客数は1万人を超えるという状況でした。また、このイベントを支える関係者、ボランティアは180人にもなり、まさに町をあげてのイベントになっています。

人間ばん馬大会の魅力は、何ととっても人間の力の限界に挑戦するところにあり、その姿に大きな感動を呼びます。オリンピック競技のように、力の限界に挑む人間の姿は非常に美しく感動的なものです。機械化され、人間の力を軽視している現代社会への警鐘、また地域社会の構成員が力をあわせて何かを成し遂げる達成感、あるいはそうしたコミュニティ意識の重要性などを考えさせてくれるイベントです。過酷な競技にもかかわらず、多くの人に支持されここまで継続してきたのも、このような本質的なところが共感を生んだものと思われれます。

人間ばん馬と町づくり

置戸町は、戦後一貫して社会教育を中心とした町づくりを行ってきたことで知られます。特に公民館と図書館による活発な社会活動は、後に図書館貸出率日本一の栄光をもたらすなど、置戸町の今日のまちづくりの基礎を築きました。

このような社会教育的な素地が、この人間ばん馬を生み出した背景にあります。そして、このことが、昭和56年正月に行われたNHKの綱引大会に推薦され優勝するという快挙につながり、それがまた置戸町や人間ばん馬大会を全国にPRするきっかけともなりました。有名なオケクラフトも、このような取り組みの延長線の中から生まれてきたものです。

最近、高齢化などで参加チームの減少が心配されているようです。しかし、人間ばん馬をここまで育て上げた置戸町民の情熱と、このイベントがもつ本質的な魅力の構造を考えると、私は心配することはないと思います。北海道を代表する地域イベントとして、今後も多くの参加者を得て発展するものと信じます。



真正面から子どもと向き合う 教育の世界

人の交流部門・銅賞
特定非営利活動法人

自然体験村虫夢と^{ムームー}ころ昆虫の家（常呂町）

レポーター 有山 忠男

夢を引き継ぐ

「虫夢と^{ムームー}ころ昆虫の家」は、常呂町吉野地区にある宿泊体験施設です。

この施設は、自衛隊を退職した故滝沢始氏が、平成元年、子供たちに自然の中での体験をさせ



小学校を改修してつくった昆虫の家

たいという思いから、廃校となっていた旧常呂町立吉野小学校を買い取り、自費を投じて改修し、教室内にカブトムシ、クワガタなど、また池ではヤマベやホタルなどの飼育を行ったのが始まりです。

しかし、平成3年に滝沢氏が急逝、このとき滝沢氏の考えに共感した人たちが氏の意思を引き継ぐと決意し、「虫夢（ムームー）友の会」を設立、事業を継続させました。その後、この施設は無料で一般に開放され、さまざまな体験活動などに利用されてきました。友の会は平成13年6月に「NPO法人 自然体験村 虫夢と^{ムームー}ころ昆虫の家」となり、さらに活発な事業を展開しています。

子どもと真正面から向き合う

昆虫の家の事業としては、全国から子どもたちを集めて開催する「いきいきオホーツク体験村」と地域の子どもたちを対象にした「週末自然体験」（月1回）、それから「オホーツク年越しの集い」などの体験事業を行っています。この中のメインイベントは、やはり2週間にも及ぶオホーツク自然体験村です。

いきいきオホーツク自然体験村は、平成12年から文部省の子ども夢基金などの助成をもらい実施している事業です。これは、小中学生を対象にした自然体験プログラムで、参加者、スタッフ総勢50人ぐらいが13泊14日、2週間にわたり合宿生活をするものです。平成16年度は、道内、兵庫県、山口県などから小・中学生26名が参加して開催されました。

これらの自然体験村を運営する人たちは、今の生ぬるい教育を公然と批判するうるさい地域のおじさんたち。そんなおじさんたちにしかられながら、一緒に生活する2週間の自然体験は、



川の生き物観察

子どもたちにとってはさぞかし耐え難い2週間だったろうと想像しますが、実は最後は感動の涙でフィナーレという、非常にドラマティックな行事でもあります。

体験活動には当然危険が伴います。しかし、若原和政事務局長は「多少のケガしてもいい。だけど（その体験を体に焼き付けて）二度と同じ過ちをするなと子どもたちに言っている。それがここに来る意味でもある」と強調します。

とはいうものの、決して子どもたちを自由にさせているわけではなく、「本当の親よりも、俺のほうが子どもと接する時間は多いよ」と若原氏が言うように、氏は2週間休暇をとって子どもとフェース・ツー・フェースで付き合っています。学校では絶対にできない、いわゆる真正面から子どもと向き合う教育の世界が、この昆虫の家にはあるようです。

この体験村でもう一つ注目したいのは、それを支えるボランティアスタッフの存在です。今回の取材には、若原事務局長のほか川上和則理事長、忠津信征さん、藤吉裕和さんの3人が同席されましたが、川上理事長は農家経営の傍らこの活動に参加し重責を果たしてくれています。忠津さんは鉄工所の経営者ですが、体験村期間中は仕事はほとんど休業状態で体験村の料理師人をしてしています。藤吉さんは建設会社の社員で、昆虫の家では広報を担当、会社勤務の傍ら毎日の結果を深夜までかかってホームページで情報発信しています。参加している子どもたちの親は、毎日そのホームページを見ているようで、通常時1日80件ぐらいのアクセスが、この期間中は毎日500~600件にもなります。このようなスタッフに支えられて、2週間のプログラムが展開されていきます。

また、大学生のボランティアも毎年十数名やってきて、子どもたちのリーダーとして活躍しています。このようなリーダーを育てるのもこの昆虫の家の大きな目的のようです。

地域の有志が楽しみながら育てるNPO

昆虫の家は、約350名の会員から一人一口5,000円の会費をもらい、そのお金で施設の運営をしています。収益事業は一切行っておらず、当然職員は無給です。

ただし、この取り組みに共感してくれる地元企業・団体などが多く、労力提供、機械提供などの支援を得て、昆虫の家の施設整備や維持管理が行われています。

「いただいた会費は付加価値をつけて3倍の事業にします」と若原事務局長が言うように、上記のような企業からの支援と助成金を得て大きな事業にすることが重要で、それが出資してくれる人たちへの恩返しになると言います。

故滝沢始氏の志は、氏と交流のあった若原氏をはじめとする人たちによって、確実に継承されているように感じました。今回の取材を通して、この事業にかける地域の男たちの夢の素晴らしさを感じると同時に、この事業で一番楽しんでいるのは、もしかしたら、その男たちであろうとも感じました。

profile

野谷 悦子 のたに えつこ

東京の医療系出版社、道新オントナ編集長、育児情報紙編集長を経て、現在は企画・編集・ライティングを行う旬うつぐみ取締役社長。公職に北海道地域づくりアドバイザー、北海道環境財団評議委員、青少年野外教育振興財団評議委員。親子で身近な自然を体験する「親子で野遊びクラブ」(<http://www.g-linknet.co.jp/~noasobi/>)や、親子で農作業をする「ちびっ子ファームクラブ」、親子で海を遊びつくす「マーメイドクラブ」を主宰する。

有山 忠男 ありやただお

1951年小樽市生まれ。'73年北海道大学農学部農学科卒業後、日本観光協会で観光計画・リゾート計画に従事。'83年株式会社環境計画設立・入社、'94年同社代表取締役社長就任。専門は造園学で、北海道各地の観光計画、農村計画、公園計画に携わる。国土交通省地域振興アドバイザー。